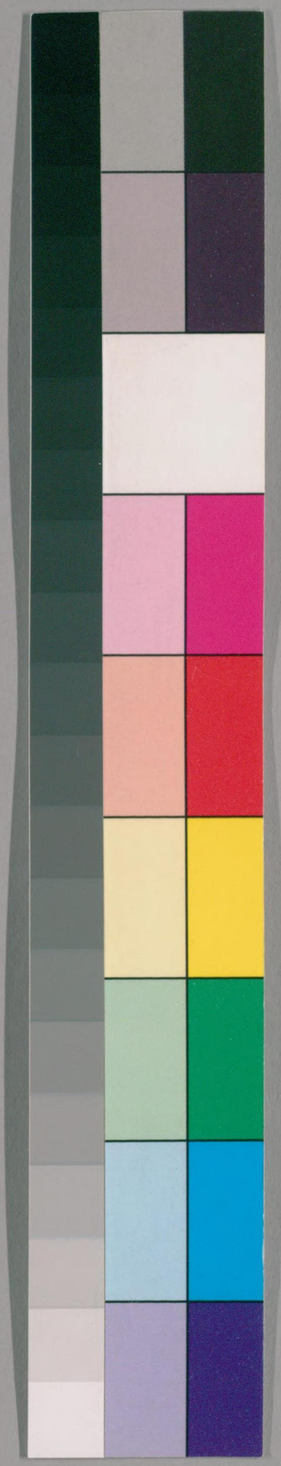
言志後録評

863
49
197



国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用

抄録

863
49
197

一三

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』 請求記号 863-197

ガラス使用

（言志後録評）

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用

八六三―一九七

言志後録之儀浮写に相成候ニ付写見候処何れ且存寄
も無御座候ニ付後筆可申上旨仰を蒙り不存寄謝
絶有之存候得共下浮見仕候処何れも高妙の御事
にて浅見の及ぶき所にも無之義のミに無御座候え共
後仕候間追て精思し猶も出来仕候ニ付最初ハ浮写
に候得共不申何存候得共扨てハ唯文字とのみにて
有之候而ハ不法に御座候て御返も無存候得共存付候儀を
俗語に相認め申候扨先生平日も文字屋ヶ有る
りのミにて再三之推敲の上にて之令返ハ勿論之遺語
ゝ未返も必す正留を之宛め候ニ之度ハ之浮写の上は

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

事に行て別して此度に著述ハ定めて何程能くし
は精思を費ら成ハ此のことを存ハ得ず假令仰を蒙り
ハこも仕事淺学し拙者底兎角中上にハ靈外子等
に此望に得ず禮にも無遠無犯ハ師に事婦の道ハ
有し且又先生に此道学に文章尚時天下に山斗に
新の入に得ず此言行ともに凡人に則を取りに所に此度に
右し場に此度に得ず此一言を此度しら成にも実に
此器易に無此度に誅に今度に著述に此度類ハ尚時本
邦に行ハ事にのこと無し後世にも傳り且外國へ流傳も
仕不中に得ず此精疎のことも此精疎に此度に根仕度事

存に右に付卿にかも愚ことに此度に場所とも不輻中に此尚又
此門下に高足にも此示し諸にし存寄とも丈に此度に
ことに尚無理に此商量に此度て無ことにて世上にも此行ひら成
に根仕度事竟右し存念にて中に此故来往に或復信
等ハ此の限書付に此仕唯存悔め即ち事存に所の於て
拙者等元来不文に此生に故言語に有ら無実胃
に此来心にも無し失禮に事もこの此度に無に此来重にも
此赦免ら来下度に

第一頁表

堯舜にして善無盡此語一躰餘姚に起りに根本存

されば早晩道理に於てしめうるの出来るや果して堯舜
とことに君あるならんとして堯舜と君は未だ君なきことに
の君に出来ぬて是をも君とせば難なる第一の君に
ないしかりて又何をか以て堯舜は此聖之かりしへきや論語
中堯舜其猶病諸の詞よりし君なきなりときき
の語をも似寄りなれば是は此までの完積の物とも皮肉の深きか中には
進みて二聖心徳上に増益の出来ざりしきなりとては云ふし極まり存在は
愚見右の如くに出来ず故に夫子論竜至朝其神明
不測なるの出来ぬを何とせるん聖人の上に又神人とせむるの
出来ぬ極みに窺ふ見ゆれとまた存在は

二頁裏

如斯鬼神前祈請一般と申す和なる哲学家甚妙とも
未存在は名称も更に何分気志如神の神の字につき
餘りに深疑すきものにて申す気を失ひ出来ぬは極きには出来
はずやと未存在は故未詳

三頁表

都是習気為し也とは無数何れも上にて出来る数洋し
聲病悪皆先天に気禀と後天に物欲とも用て
云ふ拘蔽をも来りて其の心なくしてもし後天の累の云ふ極
未存在は因出現は不能達其霊光則習気消滅すると

此事は何も却て多分は習事の消しと程なりては雲
光は遠しからぬ根に生存は但し天理人欲互に消長を為
は何も太陽出て百性論を遁るの教も有し又雲
霧を開いて天日をつんさるもあるし誠まで一偏に本来
はてはつまり義理全体は本体はやはり其義書の本来なり

五頁表

心為靈其條理とは此理とは仰はれ即性なるまで
此理はや左根解しは語は中文に差詰り根本存は
又心直に條理とのちはものと解しは語は心即理之とて
心を師と致しはの大弊を引出しは根も本来中や

此本言の以来實は万篤とは挽海本報は

五頁裏

心存中和則云々如此教を此説らぬはては名忍餘り向上に
至て学者手を下しは小無度根に本来は本程に係は
廣胖申大く数所謂教とも有は言へくは得ると
学者の教を学ひはいかでは最初より此地位に到り
得はきまし心得遠ひまくの整齊教書主一
無適し方を知れし只曾中和安卿の遇り教り
入るんと欲しはり忍るくは席を失ひ等を識して
遂ま其本切をんらるも難うへしと本存は是又

人として整正齊嚴肅至一言適にさへ出来ぬ何
にても桎梏徽纆に患もあれば殺身存ゆるものに出来
同
人一生所遭云々人果して聖賢に出来らして如何に遭の
險阻坦夷安流驚深皆其正命にもつかれば
見渡しは流れ人の上にそれは多分我と家所を隔阻
に驅り驚る瀾に漏まじゆるの世の常のことにあらずやうり
平日凶を避き吉に獨るの方とあり中度ものと本
存は愚さしてこそ凶をさけ吉に獨る即是易道と
本存は先生しこれ御は拿教自然意見不能免れは

家にさまの術数に落ち根を忘被覆は
六頁表
人物何曾有生死如此出ては全く不生不滅に意に
本来不中や去出中文消息盤虚しは学問も出来
は得ず更服存見仕ゆ度にては但右に罪を成して
不生不滅の一家を出物師出来ゆのこの後に存見仕ゆ
上は実志性にて出来ぬ是は必ず繋の出来は
出詞に根本存は
同表
中学の最認めなくは人の学魄の強弱に不拘

只是平日格物窮理の實説無之故に此書作

七頁表

克己二夫在一呼吸皆此書意ハ克己の二夫ハいつもく
一呼吸の間にありて事濟と申ニ事ハ又ハ一呼吸
の間にこの二夫ハ如こしく申ニ事ハ也ハ就まして仕ハこも
中句の五字ハ名急急劇促迫ニ至キ時ハ其存ハ
尚ハ解喩事ハ何ハ愛事言ハ

同表

人生於地而死於地平竟不能離於地と言ハ得ハ
凡そ地方ニ在ハ皆天ニて得ハ足心中の空洞も亦是

天ニ事存ハ左根ハ得ハ人ハ地ニ生ルとハ生ハ
死ニ至ルまで何事の時ハ天中ニ呼吸しハ得ぬるの
事ハ天ニ在ハ其ハ聖賢ニ言ニ於ては天地と言ハ億と
合するハ中ハ事ハ事存ハ唯高説ニ通りのミニて
地德とさく執りハ得て天德ハ執りハ得しく可也と
中根ハ多く悟多くハ得ハ如何ハ事存ハ

八頁表

養生ニ道只從自然為得誅ニ此事ハ事存ハ
名ニ有ニ於養生則ニ得養生ニ中ニ蘭香の
嗅けハ不來嗅ニ事ハ來ルニ中ニ此辭ニ云ハ來ハ

各條は別論なりと本條は抑養生にして自私自利の心
よりそまとよりなりと致し倫理總常を慶し
以前は縱令不美世令衣の素を保ち其君子の所
不爲勿論とは得共養生にあらず時は養生にならぬ
とあらずは忘しくは其實多數は程子に條養永年の
說再爐火の醫家に出せる事但君子の是を不爲年
天地の万物のつかし此一種の小術なるは明白のもの
本條は

同表

易以天云々思ふことも天と人とは二理ものは得ら

來經古來聖賢のこと仰ぬるのも或ハ天にて人を從きの
人もまた天をとは明ナル事なれども其實は易書の別必
しも此に於ては此利然は言葉其本は條は僅是には
定然しては明解の事なれば其事は何ぞ口教
は未ず本下は

十頁表

人一身に條并面背に條中に近も無し妙理と本
條は併如仰治湯を并浮收移借にめ事ニ切を
用ひ以義や分曉仕ふ事は自然此和に工夫無し此和
即是工夫に此度は各條精神を籠弄致しはの

繫を不免に拒本存に雖然既に畏肖しに立夫々に自得
に在れば此の事と称りに得ざる必ず定めて愚存とは遠
仕に家とも本存に何分通曉仕業の偏に教喩を御に

同裏

先天而天不違を廓然大公未發之中にて解し
ら求めるの名忘め何ぞ求めるや愚さしてしたん天後
天其皆已發之事とも本存に蓋先天不違とも事の
聖人迫し所為道と然契すると事に迫ら称り
乃ひ此事に此事に

十二頁裏

人尚自思察在母胎中之我心意果如何名狀此
義を佛氏識心之実似寄にて聖学盡心知性之
修行とは遠仕に拒本存にこの胎胞中心意是渾
然純一專一無善惡只有一點靈光耳とら給ひ
愚さしてしたん人の母胎中にある時只是渾然と理と
存するを已来多一點靈光に生しに此拒本存に
洪範五の思を最後に列しに此度にてもよくお
分に事とも本存に

十三表

孔子在齊條世に学者に遠遊艱難に深く於て

力を得ずるの所なりと中儀を法然しら未成ずる
可き仰は事にハ事存は得ず各抱夫子実に宋微服
し陳蔡に厄し衛に適き鄭楚に走り皆意とし
ら所得は故小力を多分に被所得ゆゑ事にハ所ハ
聖徳に害あり根を事存は凡て艱難辛苦して其に
せざるに不と増益するものハ総て地位卑きものゝ
事にて生知の聖人にハあらずしき筋にて事存は
たらひ夫子最初より志を書に所得遠游艱難し
事無しゆゑも聖徳に於ては一毫の損益なきにて
ましく所得は愚にて此不知平意め何事也

十回表

主宰に靈即性也是にては悔多き事なり禅
佛しゆゑは性にもやはへくを事存は愚にて是にて近
主宰に靈にて心と解ゆゑ度は是ハ学術の大段脳
にて所得も何分にも精義は教近本何度事教は

同表

道心性也人心情也是又是今近心得ゆゑ是ハ一家に
甚本遠位にて是今近心得ゆゑ是ハ人生まで
教なり以上案ゆゑ事と用ひすは故道と人と
分別ハ未夕無し感而動きはゆゑ始めて人心道

心に分立ては何れも未發に性と已發に情とを以て
道と人とに分配ハ如何なるものは根本存は其極惑仕は
義策重ともに挽耳可ふ事なり

十五頁表

一念發動上及觀自性不見未發時景象以挽
回し則情に所感純以性動無ふ中節也名忘は親
ことに餘り快決にて是ことに未存は左も行つき
工夫甚難し云ことも此ことを得ん思ことを中に得ん
純字無不字尚太快のなりこれ源本存は又常に戒
慎に於未發に時と云ふ綱は此に愚ことに未發に時

未タ戒情をいふ爲ならば後に戒情をもしは既り
是已發と本存は

同裏

近則狎に則狎に間或の字有ことなれば

十六裏

英質時已爲ならば聖賢も亦学ふべし
天と以て得る者未タ必ずしも脆ならば本存は
早竟如何事也は悔吝本務は

同

赤子に知好惡は可心に靈光に勿論相違も為

此ノ處ニ於テ其殆ル所以ハ寸形ノ中ニ性ニ吾ニ於テ此ノ心ニ
靈光ヲ性ニ吾ニ於テ此ノ形ニ於テ未ニ才ニ於テ殆ル危ニ
角無ク者ニ於テ心ニ性ニ於テ此ノ如キ可然ニ致ク別ニ志
ヲ得ル見ニ隔ニ於テ此ノ根ニ於テ此ノ處ニ於テ事ニ存ル事
ニ於テ此ノ

十七表

天地未嘗增一物天地未嘗減一氣是又名之不生
不滅ニ於テ多ヘ不中ニ於テ是ニ初古往今來生ニ不息
ニ於テ此ノ處ニ於テ何ノ此ノ繫ノ此ノ根ニ存上ニ於テ凡ニ小ハ大ニ
新ニ小ニ於テ此ノ一年ニ數ニ一元ニ數ニ幣リハ無ニ一身

の隆も天地ニ隆ニ同根ニ於テ一年ニ表ニ於テ秋
冬一身の少壯老死皆是生ニ易ニ於テ此ノ處ニ於テ
一向物ニ增減なりく氣も增減なりしとかしもの事ニ
根ニ於テ存ル事ハ天地も亦如此ニ事ニ存ル

十七表

儒者於經解釘牢繩縛并道與學幾死ニ
中ニ於テ尚時學ニ徒考據家者流極ニ弊
病ニ於テ此ハ誠ニ頂門上ニ一針ニ雖有ニ事ニ存ル
雖然近代以來習俗苟偸ニ於來學ニ家法宗主
とかしもの一向ニ無ニ右ニ有經ニ治め此ノ有徒ニ折衷

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

と喝く第一種にも文にも不熟先儒に傳ふ所に
只愛彼此を扭捜し此に妄に主張を出す事も不
かに得て第一是等の徒援訂解縛の説に据依
致し其猖狂を肆に住りて其害も亦不淺と事存は
左に得て一事も不可也と申ゆへ今一人なり右に
大弊を此反説に左に相に住度也

同

人間自認我軀有主宰云々呼做道公拙者に於ては
既に十四年の裏に畧中に通の見に有に忍多
くは得て此度但心とは中にのミ未タ道の字はつきや

ましくと事存は好文四畳初間自認家軀有主
宰と云ふ所は其認るは何者が認は義や甚ふ審
仕は果して和に拘は存して認しにして是にては主宰
が我りに有りにて濟ふ事中へく又其ものの主宰にて
主宰が主宰を認はと申にては全く佛家の觀
心にて先輩に議論に通り目を以て目を視ば
を以て口を說には教に聞り中へき於名師是義は
志もめ同かと事存は義に付ゆへ後義中に云

十八表

耳有天性に聰目有天性に明この聰明矣張

御下文に具味運動とは一例に聽視の字にあらはれ
度ことのみとも本存は

同

心非有二此は一條も是不審に分かに本存は各去既に
為にて中に有義に付別段に付ふ信

二十表

至於得力處則宜任其所自得こまで又各條は造
語は有快之と本存は其自得に和果して孔孟程
朱に道して大同小異に出理はりし朱程子細も各は聖
門の聖は得ち既に其自得に任せはと出朱はり或は小

同大異にも朱にも中にもしく又は一向に異端邪説に
流れ出はりしに何ら為ことのこと云ふ是は甚
云云元義と本存はるに出理は

二十一表

收斂精神云々精神の字今谿林の毎度好んで
説出しは字面に出理は得ち何かと修練家めき
はるの根に本存は中に有はめ同にはあらず此二字と放逸
の字に出取換に朱はてはめ同にや僅に本個は

二十四表

草木に萌芽云々甚く手近きこの加人の結句案の

つきはらぬものにて出来たる名称の事も面白きは道理と事存は但し併其移植し土地をとぐ必す よくも能吟味致しはくとかるの御結尾に今出言ふ出来たる度ものかと事存は

二十五裏

前に不易変化者出来と出来たるは易くは無く はらせし千万弗措し功を加へはりて終ハは変化も出来はすべし根ら存は能は度後に出来止順道すし去其過不及耳と出来たるは是ハてハ出来ハ早き変化し出来ぬものと斤付は根相変何ゆへ後お感

不仕やこも名称も事存は右にても妨ハ無出来たるやも家ハ度は

同

草木の寒温酸辛諸毒の不同はと皆出来人の事質も亦然りとら御はらしこの事の條々去不可変と出来たるも矣法ことと同根しは詔ことと言ふ存は右にては名称の陋く形事の偏塞に拮せらまして其本体の全きと充てるの不能求と人に出まして事の正しく具通はと得はものと何も差別ぞ根にお来たる

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

哲氣質変化の説にも處りはかくも本存は且中庸雖愚必明雖柔必強の愚強も高論を推して中に得ず是も大氣に斤斤不中は純五度修行の明強に於ては此事は得て出来ていくとも此事は変化の出来はるの又何の難かはきと本存は尚出来ず故に本存は

二十六表

邦俗表祭云々在吾輩則自當用儒禮と出来ばかり中にしるも忍多くは得ず在吾以下の九字なりは其不平種の所も必ずえ不中や拙を

迚も表祭佛に依りはかりしも中一所存に勿論
然る所は得ず是も尚得て天下は古政の第一
にもなるべし此五に七年小一度は寺院文人も亦形
も殺しは後兎に角此に於ては親の
大事を送りはしも佛を逃れはしも此邦に在
が最後出来ずは勢に得て從今吾輩
に出来はして儒禮を斟酌殺し寫に是を用
るにも仕事押出し自當用儒禮に於ては中
ずは我かと本存は其勤もすまじ
道深を畫さるにも出来ばして其後は

○故又冠婚の禮笠勢二家に遵ひ事此家は表祭佛にしりはしを遠て尚今は武家に於ては佛に本存は

聖賢しるに随ひ時宜を斟酌仕事ハ勿論
可有也此事第一南部大和を本始に取用之
相成ハ禮義を慶し別段一家の儀任を剣制致之
ゆゑハ忽しく聖賢の語ニも此事何ゆゑ
竟ニ角黒竟ニ於てハ邵子ニ今人敬て古衣を
服を得ニ申しさまし此新省事ニ本存ハ

同

邦俗奏ゆゑ後を求めのゆゑ拙ちニ家始めも既ニ
右根ニ此事ハ只今口より出しよりとも何しとも
中ゆゑハ出来ニ事中ハ右流条法有虞氏祖顓

頊而宗堯の文を此行ニ本全今然其奏子非後相
顓ニと申ハ説ハ名称決して右根とハ不本存ハ条
法ニ家ハ全録ニ律書ニ詞も雑り諸経ニ見る所
なき事ハ多分ニ此ハ此儒も多く疑ニ此ゆゑ
此事ハ此ニ家ハ姑若直試ニ此一思ニ遊ハ舜の天
下を以受ゆゑ全く奏子の後を求めの故ニ無く
此ゆゑニ小堯の陶唐氏をなのゝ通すして本性
の有虞氏を称せしまし此事ゆゑ出て易不論ハ行
付ニ申ニ本存ハ

二十七表

為其所蓋の字精しくハ義文とあるべし

二十八表

王政只是平穏平天下の平字可味なと諸家の

説とあるべし愚案を以て此時に至りし平の字注集類剝

極とあるべし平穏の平ハ活発の意なる平天の字味也

すなはち是又平天下の平ハ斉家の斉淵〔治〕国し淵〔治〕と

一係し字〔字〕而して朱註指斉方正の字全く之て

貼しハ根とあるべし尚宗敖とあるべし

三十表

小餘荒大凶歉とあるてしてたち穀梁傳に〔云〕

一穀不升謂之歉二穀不升謂之饑三穀不升

謂之饉四穀不升謂之荒とあるを思ひて小歉饑

大凶荒とはあるべき方ならむも我解には勘兵はあるべし

三十四表

知識在外識量在内思ひてもたゞ思ひて内にあると

あるべし若は果にして知識ハ外小量ハ内格物窮

理之功を積みて物極に知識ハ文外なる

べし

三十六表

學者して濂洛関閩の說を恭敬し佐ふして浮屠

陋劣の訓詁は諫しめて用ゆる難きことなれば其根元を
ナれハ文字の中ゟ分るゝ所ハ程朱といへとも同じ事にて
傳しもせナれハ古今の訓孝字は逆親訓忠字は
致君と云ふ事を知りて是は何かあらずとするの文義にて
も文義にやありとし文字の論せ大に本意違ひ反忠の事ゟ
るとしは詞の根にてあるを任は蓋一孝字をとるの文の事にて
孝子といふは其事一忠字をとるの文なるにて
忠臣といふはなかなかし必其精微を極め心を忘めて篤く
是をいひ終に後嗣めて忠臣とも孝子ともいふ
事を得るにて從逆親致君と云ふを得て思ふ

忠孝の字は其序ある事にして且文毫釐千里の違あり精
義入神以致用の教も其序をわきまへ大いなる道なれば
学者も得と弁へて此事済みて後此一国会要ある
ことなれハ其理なり

四十表

自察夜氣存否如何一條孟子の本文には夜氣
が仁義の良心を存しがたきを存すと只今夜氣
存否と云ふ事にていはすくさは夜氣の存否にあらず
根本中に流来者の思召は其序はかり也や若孟子を
其儘のことにて其義なりし存否を清濁に依るを求め

てゝめ母は事や此頃を同に

同裏

不縱不束從容以奏天和即便敬也至極可然
此ゝすこしてゝ其所得を拙者或有人仕ハ知ていゝ見ハ
角にも高すきにて手の下し處に有ゝ周ゝ果中に
夫と中早意ハ學官の淺キ故ゝ中に前ゝ中上
程子ゝ方に此ゝ所ゝ名不及手も下さまし少ゝ寃も
中を得に根本存に抑高說ゝ儘手の下さまし處
此ゝ所ゝ何ゝも此攪海本仰に

同

邦俗途遇柩時云ゝ邦俗とは此ゝ吾邦不
然ゝ事ゝ本來和國へ突へ出ても擧邦押並て
尾籠の風俗ゝ云ゝ察め母とも事存に夫迚も實に
左根にはり是も又解よりも無きゝ事ゝ此ゝ先拙者
御里抜ゝ一向右根ゝ事ゝ云ゝ事ゝ左ゝ得て是も
只其都下の風俗ゝも可ゝ此ゝ事ゝ也ゝ事存に左ゝ足諭
關西に及ぬ拙者ゝ不我に此ゝ得て他國の事に無ゝ
も不事ゝ他邦俗ゝ此ゝ家西ハ名ゝ將廣ゝ事ゝ根
本存に得て只都下ゝ俗ゝ根仰せなさまして一種や
本國度に義に此ゝ事に

1

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

四十二表

孟子ニ後千四百年ニ至テ周程その不傳の繼と續ニ
朱子ニ至リテ其道始ニ昭晰ニ付ル事ニ切ナル
論ニ即チ朱子ハいかゞ周程ニ至リ遠し
ニ其存ニ志ありと只今紫陽金谿及張呂雅有
異同而其実皆純全道学と称し其来ニ得ル
朱子と三子と全く同理ニ根ニ変ヘ中ニ在テハ名様
朱子と其来ニ説ニ得ル事極めて卑しく三子を見る
ニ其ニ来ニ極めてこゝろ也ニ其ニ得ル
且皆純全道学と仰ニ事も不審ニ不堪事

存ニ凡テ天地ニ分ル両是ニ無ニ無しこものと非ニ
朱子終身陸と排せしまし張呂と惜まし事
文集語類中一ツ見ニ足ニ得ル事ニ排せしれ
惜まし事ニ見ニ得ル三子ハ必ず非ニ極まり見ニ
三子是ニ得ル朱子ハ亦非ニ極まり事ニ能ると
今皆純全の事と云ニ其ニ得ル言両是ニ無非
のことあるに其存ニ精ニ其何度筋も得ル事
一時異ニ非ニ中上ニ見ニ雖ニ得ル純ニ周
時と窺ニ見ニ委細ハ口上ニて中ニ不否ニ
質問仕度事頼ニ存ニ通り存念書付中上ニ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

朱文公文集十一　壬午應詔封事

臣聞之堯舜禹之相授也其言曰人心惟危道心惟微惟精惟一允執厥中夫堯舜禹皆大聖人也生而知之宜無事於學矣而猶曰精猶曰一猶曰執者明雖生而知之亦資學以成之也

同上　同　如

古者禪授之懿莫如堯舜之盛而舜承堯禪二十有八年之間其於禮樂刑政更張多矣其大者舉十六相皆堯之所未舉去四凶皆堯之所未去然而舜不以爲嫌堯不以爲罪天下之人不以爲非載在虞書孔子録之以爲大典垂萬世法而況臣之所陳非欲盡取太上皇帝約束紛更之也非貴其所賤賤其所貴而悉更置之也因革損益顧義理如何爾亦何不可而陛

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

下何嫌之有哉願早圖之以幸天下毋疑於臣之計也

同十二　己酉擬上封事

所謂遠便嬖以近忠直者臣聞蓬生麻中不扶而直白沙在泥不染而黑故賈誼之言曰習與正人居之不能無正猶生長於齊之地不能不齊言也習與不正人居之不能無不正猶生長於楚之地不能不楚言也是以古之聖賢欲脩身以治人者必遠便嬖以近忠直蓋君子小人如水炭之不相容薰蕕之不相入小人進則君子必退君子親則小人必疎未有可以兼收並蓄而不相害者也能審乎此以定取舍則其見聞之益薰陶之助所以謹邪僻之防安義理之習者自不能已而其舉措刑賞所以施於外者必無偏陂之失一有不審則不惟其妄行請託竊弄威權有以害吾之政事而其導諛薰染使人不自知覺而與之俱化則其害吾之本心正性又有不可勝言者然而此輩其類不同蓋有本出下流不知禮義而稍通文墨者亦有服儒衣冠叨竊科第而實全無行檢者是皆

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

國家之大賊人主之大蟊苟非心正身脩有
以灼見其情狀如臭惡之(可惡)則亦何以遠之而
來忠直之士望德業之成予諸葛亮有言親
賢臣遠小人此先漢所以興隆也親小人遠賢
臣此後漢所以傾頹也先帝在時每與臣論
此事未嘗不歎息痛恨於桓靈也本朝大
儒程頤在元祐間常進言於朝以爲人主當
使一日之中親賢士大夫之時多親宦宮妾
之時少則可以涵養氣質薰陶德性此皆切至
之言也然後主不能用亮之言故卒以黃皓陳

祇而亡其國元祐大臣亦不能白用願說故紹
聖元符之禍至今言之猶可哀痛前事不遠
惟聖明之留意焉則天下幸甚

通鑑一 周威烈王 三ウ

是故才德全盡謂之聖人才德兼亡謂之愚人
德勝才謂之君子才勝德謂之小人凡取人之
術苟不得聖人君子而與(得)其小人不如得愚人
何則君子挾才以為善小人挾才以為惡挾
才以為善者善無不至矣挾才以為惡者惡
亦無不至矣愚者雖欲為不善智不能周力

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

不能勝譬如乳狗搏人人得而制之小人智足
以遂其奸勇足以決其暴是虎而翼者也其為
害豈不多哉

同上　　千八ウ

子思言苟變於衛侯曰其才可將五百乘公曰
吾知其可將然變也嘗為吏賦於民而食人
二雞子故弗用也子思曰夫聖人之官人猶
匠之用木也取其所長棄其所短故杞梓連
抱而有數尺之朽良工不棄今君處戰國之
世選爪牙之士而以二卵棄千城之將此不

可使聞於鄰國也公再拜曰謹受教矣

通鑑　周紀五　十九ウ

子順曰孔子六世孫　古之善爲政者其初不能
無詬子產相鄭三年而後詬止吾先君之
相魯三月而後詬止今吾爲政日新雖不
能及賢庸知詬乎文咨曰未識先君之詬
何也子順曰先君相魯人誦之曰麛裘投之無郵及三月
芾投之無戾芾而麛裘政化既成民又誦曰麛裘衣章甫實獲我所
章甫裘衣惠我無私

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

趙田部吏趙奢收租稅平原君家不肯出
趙奢以濾治之殺平原君用事者九人平
原君怒將殺之趙奢曰君於趙爲貴公子
今縱君家而不奉公則濾削濾削則國弱
國弱則諸侯加兵是無趙也君安得有此富乎
以君之貴奉公如法則上下平上下平則
國彊國彊則趙固而君爲貴戚豈輕於天
下邪平原君以爲賢言之於王王使治國
賦大平民富而府庫實

武帝招延士大夫常如不足然性嚴峻羣
臣雖素所愛信者或小有犯法或欺罔輒
按誅之無所寬假汲黯諫曰陛下求賢甚
勞未盡其用輒已殺之以有限之士恣無
已之誅臣恐天下賢才將盡陛下誰與共
爲治乎黯言之甚怒上笑而諭之曰何世
無才患人不能識之耳苟能識之何患無
人夫所謂才者猶有用之器也有才而不
肯盡用與無才同不殺何施黯曰臣雖不

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

能以言屈陛下而心猶以爲非願陛下自
今改之無以臣爲愚而不知理也上顧羣
臣曰黯自言爲便辟則不可自言爲愚豈
不信然乎

同 漢紀十三 三十四ウ

是時暴勝之爲直指使者所誅殺二千石
以下尤多威震州郡至渤海聞郡人雋不
疑賢請與相見不疑容貌尊嚴衣冠甚偉
勝之躧屣起迎登堂坐定不疑據地曰竊
伏海瀕聞暴公子舊矣今乃承顏接辭凡
爲吏太剛則折太柔則廢威行施之以恩
然後樹功揚名永終天祿勝之深納其戒
乃還表薦不疑上召拜不疑爲青州刺史

同 同十四 三十二ウ

臣光曰天下信未嘗無士也武帝好四夷
之功而勇銳輕死之士充滿朝廷闢土廣
地無不如意及後息民重農而趙過之儔
教民耕耘民亦被其利此一君之身趣好
殊別而士輒應之誠使武帝兼三王之量
以興商周之治其無三代之臣乎

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

左傳十九　襄公三十年　二十二ウ

子產從政一年輿人誦之曰取我衣冠而
褚之取我田疇而伍之孰殺子產吾其與
之及三年又誦之曰我有子弟子產誨之我
有田疇子產殖之子產而死誰其嗣之

同　同　三十一年　三十ウ

鄭人游于鄉校以論執政然明謂子產曰
毀鄉校如何子產曰何爲夫人朝夕退而
游焉以議執政之善者吾否其所善者吾則行
之其所惡者吾則改之是吾師也若之何
毀之我聞忠善以損怨不聞作威以防怨
豈不遽止然猶防川大決所犯傷人必多
吾不克救也不如小決使道不如吾聞而
藥之也然明曰蔑也今而後知吾子之信
可事也小人實不才若果行此其鄭國實
賴之豈唯二三臣仲尼聞是語也曰以是
觀之人謂子產不仁吾不信也

同廿四　昭公二十一年　二十三ウ

鄭子產有疾謂子大叔曰我死子必爲政
唯有德者能以寬服民其次莫如猛夫火

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

烈民望而畏之故鮮死焉水懦弱民狎而
翫之則多死焉故寛難疾數月而卒大叔
爲政不忍猛而寛鄭國多盜取人於萑苻
之澤大叔悔之曰吾早從夫子不及此興
徒兵以攻萑苻之盜盡殺之盜少止仲尼
曰善哉政寛則民慢慢則糾之以猛猛則
民殘殘則施之以寛寛以濟猛猛以濟寛
政是以和詩曰民亦勞止汔可小康惠此
中國以綏四方施之以寛也毋從詭隨以
謹無良式遏寇虐慘不畏明糾之以猛也

柔遠能邇以定我王平之以和也又曰不
競不絿不剛不柔布政優優百禄是遒和
之至也及子産卒仲尼聞之出涕曰古之
遺愛也

夫獄者天下之大命也死者不可復生絶
者不可復屬書曰與其殺不辜寧失不經
今治獄吏則不然上下相敺以刻爲明深
者獲公名平者多後患故治獄之吏皆欲
人死非憎人也自安之道在人之死是以

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

死人之血流離於市被刑之徒比肩而立
大辟之計歲以萬數此仁聖之所以傷也
太平之未洽凡以此也夫人情安則樂生
痛則思死棰楚之下何求而不得故囚人
不勝痛則飾辭以示之吏治者利其然則
指導以明之上奏畏郤則鍛鍊而周内之
葢奏當之成雖皐陶聽之猶以爲死有餘
辜何則成鍊者衆文致之罪明也故俗語
曰畫地爲獄議不入刻木爲吏期不對此
皆疾吏之風悲痛之辭也唯陛下省灋制

寛刑罰則太平之風可興於世

同　同　十二ヲ

初霍氏奢侈茂陵徐生曰霍氏必亡夫奢
則不遜不遜則侮上侮上者逆道也在人
之右衆必害之霍氏秉權日久害之者多
矣天下害之而又行以逆道不亡何待

同　同　十六ヲ

趙廣漢好用世吏子孫新進年少者專厲
彊壯蠭氣見事風生無所回避率多果敢
之計莫爲持難終以此敗

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

楊惲既失爵位家居治產業以財自娛其友人安定太守西河孫會宗與惲書諫戒之爲言大臣廢退當閉閤門惶懼爲可憐之意不當治產業通賓客有稱譽

陽明以禪之實而託於儒其流害固不可勝言矣然其所以爲禪者如之何曰明乎心性之辨則知禪矣知禪則知陽明矣今夫人之生也氣聚而成形而氣之精英又聚而爲心是心也神明不測變化無方要之亦氣也其中所具之理則性也故程子曰性卽理也邵子曰心者性之郛郭朱子曰靈處是心不是性是心者性之所寓而非卽性也性也者寓於心而非卽心也

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

先儒辨之亦至明矣若夫禪者則以知覺
為性而以知覺之發動者為心故彼之所
謂性則吾之所謂心也彼之所謂心則吾
之所謂意也其所以滅彝倫離仁義張皇
詭怪而自放於準繩之外者皆由不知有
性而以知覺當之耳何則既以知覺為性
則其所欲保養而勿失者惟是而已一切
人倫庶物之理皆是以為我之障而惟恐
其或累宜其盡舉而棄之也陽明言性無
善無惡蓋亦指知覺為性也其所謂良知

所謂天理所謂至善莫非指此而已故其
言曰佛氏本來面目即我門所謂良知又
曰良知即天理又曰無善無惡乃所謂至
善雖其縱橫變幻不可究詰而其大旨亦
可睹矣充其說則人倫庶物固於我何有
而特以束縛于聖人之教未敢肆然決裂
也則又為之說曰良知苟存自能酬酢萬
變非若禪家之遺棄事物也其為說則然
然學者苟無格物窮理之功而欲持此心
之知覺以自試於萬變其所見為是者果

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

是而見為非者果非乎又況其心本以為
人倫庶物初無與於我不得已而應之以
不得已而應之心而處夫未嘗窮究之事
其不至於顛倒錯謬者幾希其倡之者雖
不敢自居於禪陰合而陽離其繼起者則
直以禪自任不復有所忌憚此陽明之學
所以為禍於天下也涇陽景逸深懲其弊知
夫知覺之非性而無善無惡不可以言性
其所以排擊陽明者亦可謂得其本矣然
其學也專以靜坐為主則其所重仍在知

覺雖云事物之理乃吾性所固有而亦當
窮究然既倫重於靜則窮之未必能盡其
精微而不免於過不及是故以理為外而
欲以心籠罩之者陽明之学也以理為内
而欲以心籠罩之者高顧之学也陽明之
病在認心為性高顧之病在惡動求靜我
觀高子之論學也言一貫則以為是入門
之学言盡心則以為盡心然後知性言格
物則曰知本之謂物格與程朱之論往往
齟齬而不合者無他蓋欲以靜坐為主則

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

凡先儒致知窮理存心養性之法不得不
為之變易夫靜坐之說雖程朱亦有之不
過欲使学者動靜交養無頃刻之離耳非
如高子因学記中所言必欲澄神默坐使
呈露面目然(後)有以為下手之地也由是觀
之則高顧之学雖箴砭陽明多切中其病
至於本源之地仍不能出其範圍豈非陽
明之說浸淫於人心雖有大賢不免猶蹈
其弊乎吾嘗推求其故天下学者所以樂
趨於陽明而不可遏者有二一則為其学

者可以縱肆自適非若程朱之履繩蹈矩
不可假借也一則其学專以知覺為主謂
人身有生死而知覺無生死故其視天下
一切皆幻而惟此為真故不賢者既樂其
縱肆而賢者又思求其無生死者此所以
羣趨而不能舍嗚呼縱肆之不可易明也
至於無生死之說則真禪家之妄耳学者
取程朱陰陽屈伸往來之論潛心熟玩焉
其理亦彰彰矣奈何不此之學而彼之是
惑乎

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

羅整菴先生存藁一

與王陽明書

昨拜書後一日始獲奉領所惠大学古本朱子晩年定論二編珍感珍感某無似往在南都嘗蒙誨益第苦多病怯於詰言未克傾吐所懷以求歸於一是恒用為歉去年夏士友有以傳習錄見示者亟讀一過則凡向日所聞往往具在而他所未聞者尚多乃今又獲并讀二書何其幸也顧惟不敏再三尋繹終未能得其旨歸而向日有疑嘗以面請而未決者復叢集而不可解深惟執事所以惠教之意將不徒然輒敢一二條陳仰煩開示率爾之罪度弘度之能容也切詳大学古本之復益以人之為学但當求之於内而程朱格物之説不免求之於外聖人之意殆不其然於是遂去朱子之分章而削其所補之傳直以支離目之曾無所用夫當仁不讓可謂勇矣竊惟聖門設教文行兼資博学於文厥有明訓顔淵稱夫子之善誘亦曰博我以文

文果内耶外耶是固無難辨者凡程朱之
所為說有戾於此者乎如必以学不資於
外求但當反觀内省以為務則正心誠意
四字亦何不盡之有何必於入門之際使
困以格物一段工夫也觀經既有此文理
當尊信又不容不有以處之則從而為之
訓曰物者意之用也格者正也正其不正
以歸於正也其為訓如此要使之内而不
不外以會歸一處亦嘗就以此訓推之如
曰意用於事親即事親之事而格之正其
事親之事之不正者以歸於正而必盡夫
天理蓋猶未及知字已見其繳繞迂曲而
難明矣審如所訓茲惟大学之始苟能即
事即物正其不正以歸於正而皆盡夫天
理則心亦既正矣意亦既誠矣繼此誠意
正心之目無乃重復堆疊而無用乎大哉
乾元萬物資始至哉坤元萬物資生凡吾
之有此身與夫萬物之為萬物孰非出於
乾坤其理固皆乾坤之理也自我而觀物
固物也以理觀之我亦物也渾然一致而

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』 請求記号 863-197
ガラス使用

已夫何分於内外乎所貴乎格物者正欲
即其分之殊而有見乎理之一無彼無此
無欠無餘而實有所統會夫然後謂之知
至亦即所謂知止而大本於是乎可立達
道於是乎可行自誠正以至於治平庶乎
可以一以貫之而無遺矣然學者之資稟
不齊工夫不等其能格與否或深或遲或
速詎容以一言盡哉惟是聖門大学之教
其道固無以易此学者所當由之以入不
可誣也外此或誇多而鬬靡則溺於外而
遺其内或厭繁而喜徑則局於内而遺其
外溺於外而遺其内俗学是已局於内而
遺其外禪学是已凡為禪学之至者必自
以為明心見性然於天人物我未有不二
之者是可謂之有眞見乎使其見之果眞
則極天下之至賾而不可惡一毛一髮皆
吾體也又安肯叛君父捐妻子以自陷於
禽獸之域哉今欲援俗学之溺而未有深
杜禪学之萌使夫有志於学聖賢者將或
昧於所從恐不可不過為之慮也又詳朱

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

子定倫之編蓋以其中歲以前所見未眞
爰及晩年始克有悟乃於其論學書尺三
數十卷之内摘此三十餘條其意皆主於
向裏者以為得於旣悟之餘而斷其為定
論斯其所擇宜亦精矣第不知所謂晩年
者斷以何年為定麤軀病暑未暇詳考偶
考得何叔京氏卒於淳熙乙未時朱子年
方四十有六爾後二年丁酉而論孟集註
或問始成今有取於答何書者四通以為
晩年定論至於集註或問則以為中年未
定之說竊恐考之欠詳而立論之太果也
又所取答黃直卿一書監本止云此是向
來差誤別無定本二字所編刻增此二字
當別有據而序中又變定字為舊字却未
詳本字同所指否朱子有答呂東萊一書
嘗及定本之說然非指集註或問也凡此
愚皆不能無疑顧猶未足深論竊以執事
天資絕出而日新不已向來恍若有悟之
後自以為證諸五經四子沛然若決江河
而放諸海又以為精明的確洞然無復可

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

疑某固信其非虛語也然又以為獨於朱子之說有相牴牾之悟揆之於理容有是耶他說姑未敢詰嘗讀朱子文集其第三十二卷皆與張南軒答問書內第四書亦自以為其於實體似益精明因復取凡聖賢之書以及近世諸老先生之遺語讀而驗之則又無一不合蓋平日所疑而未白者今皆不待安排往往自見灑落處與執事之所以自序者無一語不相似也書中發其所見不為不明而卷未一書提綱振領尤為詳盡窮以為千聖相傳之心学殆無以出此矣不知何故獨不為執事所取無亦偶然也耶若以此二書為不過姑取之以證成庸章句或問不容別有一般道理雖或其間小有出入自不妨隨處明辨也如其以為未合則是執事精明之見決與朱子異矣凡此三十餘條者不過姑取之以證成高論而所謂先得我心之所同然者安知不有毫釐之不同者為崇於其間以成牴牾之大隙哉不可不詳推其所以然也又

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

執事於朱子之後特推草廬吳氏以為見
之尤眞而取其一說以附於三十餘之後
竊以草廬晩年所見端的與否良未易知
蓋吾儒昭昭之云釋氏亦每言之毫釐之
差正在於此卽草廬所見果有合於吾之
所謂昭昭者安知非其四十年間鑽研文
義之效殆所謂眞積力久而豁然貫通者
也蓋雖以明道先生之高明純粹又早獲
親炙於濂溪以發其吟風弄月之趣亦必
反求諸六經而後得之但其所稟隣於生

知聞一以知十與他人極力於鑽研者不
同耳又安得以前日之鑽研文義為非而
以墮此科臼為悔夫得魚忘筌蹄以為多
可也矜魚兎之獲而反追咎筌蹄以為多
事其可乎哉然世之徒事鑽研而不知反
說約者則不可不深有儆於斯言也抑草
廬既有見夫所謂昭昭者又以不使有須
臾之間斷為庶幾乎尊之之道其亦然矣
而下文乃云於此有未能則問於人学於
已而必欲其至夫其須臾之間斷與否

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

豈他人之所能與且既知所以尊之之道
在此一有間斷則繼續之而已又安得以
為未能而別有所謂学哉是則見道固難
而體道尤難道誠未易明而学誠不可講
恐未可安於所見而遂以為極則也某非
知道者然黽勉以求之亦有年矣疑尋衰
晚茫無所得乃欲與一代之英論学多見
其不知量也雖然執事平日相與之意良
不薄矣雖則駑鈍心誠感慕而樂求教焉
一得之愚用悉陳之而不敢隱其他節目
所欲言者頗多筆硯久疎收拾不上然其
大要亦畧可覩矣伏惟經畧之暇試一觀
焉還賜一言以決其可否幸甚

馬援少時以家用不足辭其兄況欲就邊
郡田牧況曰汝大才當晚成良工不示人
以朴且從所好遂之北地田牧常謂客曰
丈夫為志窮當益堅老當益壯後有畜數
千頭穀數萬斛既而歎曰凡殖財產貴其

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

能賑施也否則守錢虜耳乃盡散於親舊

馬援自交阯還平陵孟冀迎勞之援曰方匈奴烏桓尚擾北邊欲自請擊之男兒要當死於邊野以馬革裹尸還葬耳何能臥床上在兒女子手中邪冀曰諒為烈士當如是矣十二月匈奴再寇天水扶風上黨援自請擊帝許之使出屯襄國詔百官祖道援謂黃門郎梁松竇固曰凡人富貴當使可復賤也如卿等欲不可復賤居高堅

自持勉思鄙言

臣光曰天下有道君子揚于王庭以正小人之罪而莫敢不服天下無道君子囊括不言以避小人之禍而猶或不免（黨）人生昏亂之世不在其位四海橫流而欲以口舌救之臧否人物激濁揚清撩虺蛇之頭踐虎狼之尾以至身被淫刑禍及朋友士類殲滅而國隨以亡不亦悲乎夫唯郭泰既明且哲以保其身申屠蟠見幾而作不俟

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用

終日卓乎其不可及已

同　六十六　同　五十八　三丁ウ

丞相掾和洽言于曹操曰天下之人材德各殊不可以一節取也儉素過中自以處身則可以此格物所失或多今朝廷之議吏有著新衣乘好車者謂之不清形容不飾衣裘敝壞者謂之廉潔至令士大夫故汙辱其衣藏其輿服朝府大吏或自挈壺飧以入官寺夫立教（觀）俗貴處中庸爲可繼也今崇一概難堪之行以檢殊塗勉而爲之

必有疲瘁古之大教務在通人情而已凡激詭之行則容隱僞矣操善之

同　同　十六丁ウ

故事破賊文書以一爲十國淵上首級皆如其實數操問其故淵曰夫征討外寇多其斬獲之數者欲以大武功聳民聽也河間在封域之內銀等叛逆雖克捷有功淵竊恥之操大悅

同　六十八　同　六十　二十五丁ウ

臣光曰教化國家之急務也而俗吏慢之

風俗天下之大事也而庸君忽之夫惟明
智君子深識長慮然後知其爲益之大而
收功之遠也光武遭漢中衰羣雄糜沸奮
起布衣紹怵前緒征伐四方日不暇給乃
能敦尚經術賓延儒雅開廣學校修明禮
樂武功既成文德亦洽繼以孝明孝章遹
追先志臨雍拜老橫經問道自公卿大夫
至於郡縣之吏咸選用經明行修之人虎
賁衛士皆習孝經匈奴子弟亦遊太學是
以教立於上俗成於下其忠厚清修之士

豈惟取重於搢紳亦見慕於衆庶愚鄙汚
穢之人豈惟不容於朝廷亦見棄于鄉里
自三代既亡風化之美未有若東漢之盛
者也及孝和以降貴戚擅權嬖倖用事賞
罰無章賄賂公行賢愚渾殺是非顛倒可
謂亂矣然猶縣縣不至於亡者上則有公
卿大夫袁安楊震李固杜喬陳蕃李膺之
徒面引廷爭用公義以扶其危下則有布
衣之士符融郭泰范滂許邵之流立私論
以救其敗是以政治雖濁而風俗不衰至

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』 請求記号 863-197
ガラス使用

有觸冐斧鉞僵仆於前而忠義奮發繼起於後隨踵就戮視死如歸夫豈特數子之賢哉亦光武明章之遺化也當是之時苟有明君作而振之則漢氏之祚猶未可量也不幸承陵夷頹敝之餘重以桓靈之昏虐保養姦回過於骨肉殄滅忠良甚於寇讎積多士之憤蓄四海之怒於是何進召戎董卓乘釁秉紹之徒。從而構難遂使乘輿播越宗廟丘墟王室蕩覆烝民塗炭大命隕絕不可復救然州郡擁兵專地者雖互相呑噬猶未嘗不以尊漢爲辭以魏武之暴戾彊偪加有大功於天下其蓄無君之心久矣乃至沒身不敢廢漢而自立豈其志之不欲哉猶畏名義而自抑也由是觀之教化安可慢風俗安可忽哉

始温方盛用事餘姚虞俊歎曰張惠恕才多智少華而不實怨之所聚有覆家之禍吾見其兆矣無幾何而敗

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197
ガラス使用

863
197

10627

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用

863
49
197

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『言志後録評』　請求記号 863-197

ガラス使用